オピニオン「オープンカレッジ」

現代社会学部今村薫教授の「今日のカザフスタンの牧畜～注目浴びるラクダ発酵乳～」掲載

●中部経済新聞　2016年7月6日（水）

Opinion オピニオン

オープンカレッジ

今日のカザフスタンの牧畜

注目浴びるラクダ発酵乳

名古屋学院大学
現代社会学部教授
今村　薫

いまむら　かおる　人類学。京都大学博士（理学）。1960年生まれ。

カザフスタンは日本にはなじみが薄いが、中国の西隣に位置する。北側にロシアと国境を接したままカザフ草原が東西に伸び、西の端はカスピ海で終わる。

1991年のソ連崩壊後のカザフスタンの主な産業は石油、ガス、ウランなど豊富な資源開発によるものだが、20世紀初頭にソ連に組み込まれるまでは、カザフ人は伝統的な遊牧生活を送っていた。その生活は、典型的なステップ型の遊牧経済・文化に支えられており、家畜はヒツジ、ラクダ、ウマが中心であった。

私は、2011年からカザフスタンのラクダ牧畜に注目して人類学的調査を進めている。

ラクダにはフタコブラクダとヒトコブラクダの2種がある。この2種の分布域は本来重ならないのだが、カザフスタンではこれら両方が飼われており、積極的にハイブリッド種が作出されている。ラクダの用途は、荷役、食肉、乳、毛と多岐にわたり、とくにソ連時代には用途に応じて合理化がすすめられてきた。

この百年のカザフスタンにおけるラクダ飼育はソ連時代の集団農場の影響を色濃く受け、ラクダ保有頭数は、1927年の120万頭から90年代の10万頭まで激減した。伝統的なカザフ人のラクダ飼育の目的は運搬用、あるいは儀礼用、また財産の保存用として必要頭数以上に多数飼われていたのだが、ソ連時代には集団農場経営のために一人当たりの家畜頭数が制限されるなどの合理化の結果、ラクダ頭数が大きく減少し、おもに食肉用に飼われたのである。

91年の独立後も、ラクダ頭数は減り続けたが、99年を底に増加に転じる。これは、近年、ラクダの乳、とくに発酵乳（シュバット）の健康面における効用が強調されるようになったからである。ラクダの生乳は薬としてごく少量飲まれることはあるが、発酵乳の方が一般的である。

ラクダ発酵乳には数％のアルコールが含まれているが、今や健康食品としてどの家の冷蔵庫にもおいてあり、子供から老人まで飲んでいる。ビタミンCや免疫グロブリンが含まれており、病気への抵抗力をつけるだけでなく、アンチエイジングの効果があると宣伝されている。中東ではラクダ発酵乳をヨーロッパへ輸出しているとも聞く。

ラクダの乳が注目されるにつれて、カザフスタンで飼われるラクダの品種がフタコブラクダからヒトコブラクダへと変化しつつある。近年は、ラクダ乳の健康面における効用が強調されるようになり、乳量の多いヒトコブラクダをもとにした雑種作出が盛んである。

かつては、フタコブラクダが主流で、最近までカザフスタン全体では80％がフタコブラクダであった。しかし、ヒトコブラクダは乳生産量が多いことから、ヒトコブラクダをトルクメニスタンなどの国外から導入するようになった。

今日のラクダ飼育の方法は、カザフ人の伝統的方法を受け継ぎつつ、ソ連時代の集団農場の影響を多大に受け、さらにソ連崩壊後は、市場経済の渦中に投げ込まれ、ラクダ発酵乳の健康ブームとともにラクダ飼育が企業家によって大規模化している。